

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# まちづくりと市民のキャリアデザイン(2) : NPO法人野田文化広場が町田市郷土博物館を運営する基本的な考え方

著者	金山 喜昭
出版者	法政大学キャリアデザイン学部
雑誌名	法政大学キャリアデザイン学部紀要
巻	4
ページ	191-212
発行年	2007-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/3391">http://hdl.handle.net/10114/3391</a>

# まちづくりと市民のキャリアデザイン(2)

—NPO法人野田文化広場が野田市郷土博物館を運営する基本的な考え方—

法政大学キャリアデザイン学部助教授 金 山 喜 昭

## はじめに

2005年6月に千葉県野田市にて日本キャリアデザイン学会の中間大会が開催された。そのテーマは「まちづくりとキャリアデザイン」であった。大会では「まちづくり」はそれ自体が目的となるものではなく、まちづくりの過程の中から「人づくり」が行われていくことが確認されたことであろう。それは地域社会において、人がその担い手となり、どのように市民性を具えていくかというキャリアデザインを今後考えていく契機になった<sup>(1)</sup>。

その意義は大きく、その後、野田市は「市民のキャリアデザイン」を行政の政策に位置づけるようになった。その具体的な事業の一つとして、野田市は野田市郷土博物館と野田市市民会館（旧茂木佐平治邸）（以後、両者を博物館と総称するが、必要に応じて市民会館を使用する）を、市民のキャリアデザインを推進する場にすることを計画した。これまでのように行政が直営で運営するものでなく、指定管理者制度を導入することにし、私が事務局長を務めるNPO法人野田文化広場（以後、野田文化広場と呼ぶ）が適格者として随意指定された<sup>(2)</sup>。その理由は、これまでに、寺子屋講座の「仕事人講話」のような人々のキャリア形成に着目した講座を実施し<sup>(3)</sup>、観月会のような交流会や、俳句と絵画を併せた展覧会により異分野の人たち同士の出会いの機会を設定するなど、キャリアデザインの視点に立った企画を実施してきたことが評価されたと思われる。今後、野田市の審査や市議会の議決を経て、2007年4月から野田文化広場が指定管理者としてそれらを運営する予定となっている。

本稿では、今後博物館をキャリアデザインの視点から運営する基本的な考え

方を述べる。また、NPO法人が指定管理者として運営する今日的な意味についても述べる。

## 1. 生涯学習とキャリアデザイン

生涯学習の考え方は、ユネスコのポール・ラングランによる「生涯教育」“life-long integrated education”の提唱を受けて、1981年の中央教育審議会答申で次のように述べられた。「変化の激しい社会にあっては、人々は、自己の充実・啓発や生活向上のため、適切かつ豊かな学習の機会を求めている。これらの学習は、各人が自発的意志に基づいて行うことを基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段・方法は、これを自ら選んで、生涯を通じて行うものである」<sup>(4)</sup>としている。

「生涯教育」は、その後に学習は自由意思に基づき意欲をもち行い、自分にあった手段や方法によることがふさわしいとし、学習者の立場から「生涯学習」と一般化されるようになった<sup>(5)</sup>。

よって、生涯学習とは、個人の自発的意思に基づき、必要に応じて自分に適した手段や方法を選んで生涯を通じて行うものであり、その学習形態は学校などの組織的な学習活動以外にも、スポーツ・文化活動、趣味、レクリエーションなどの様々な活動でも行われることをいう。

### (1) なぜ地域社会でキャリアデザインなのか

今日キャリアデザインは、地域社会で生活する人たちにとっても不可欠となっている。

では、なぜキャリアデザインが問われるのか。高度経済成長期に比べて1990年代以降の産業構造の変化によるニューエコノミーの到来によって生じた社会を「希望格差社会」<sup>(6)</sup>という。提唱者の山田昌弘は、ニューエコノミーは、IT産業やグローバル化が進み、モノよりサービスが優勢になる時代であるという。現代のように、生活するには困らない程度の豊かさがあると、消費者に多様な商品をより安く提供する圧力が加わり、これまでの「大量生産・大量消費」からサービスを重視する価値観に転換する。そこから、クリエイティブな能力や専門的な知識をもった少数の労働者と、マニュアル通りに働く多数の単

純労働者を必要とする雇用の二極化が生じる。後者は、賃金は安く不安定な雇用条件となり、希望を見出せない若者の増加はここに起因しているという。公務員の世界にもフルタイムの嘱託職員が増え、専門技術者などの様々な職域でも同じような現象が起こっている。それは地域社会の閉塞感にも繋がっている<sup>(7)</sup>。

高度経済成長期は、多くの人たちが豊かさを謳歌できた時代である。希望を持つことのできた時代であった。山田はその理由として、①職業領域において、「企業の男性雇用の安定と収入増加」、②家族領域における「サラリーマン－主婦型家族の安定と生活水準の向上」、③教育領域における「学校教育の職業振り分け機能の成功と学歴上昇、が人々に希望をもたらししていたとする<sup>(8)</sup>。それにより、地域社会の商・工業が発展したし、治安も保たれ、人々の趣味やレクリエーションの文化活動なども盛んであった。この時代は、「一億総中流意識」とも言われたように、「みんな一緒に豊かな生活を築くことができた」<sup>(9)</sup> 時代であった。経済成長期でも人々が格差を意識することが少なかったといわれる。

野田でも、この時代の商店街には活気があった。人通りは多く、どの店も繁盛していた。子どもたちは空き地や路地裏などで日常的遊んでいた。周辺の農村部では田畑が一面に広がり、農繁期には作業に励み、祭りなどの行事も活発に行われ、村落の共同体意識が生きていた時代である。

ところが、現在野田の中心部は、商店街の衰退が著しく「シャッター通り」になっている。商店の後継者不足は深刻で、多くの商店主は商売意欲を喪失して今の世代で店を閉じるという。フリーターやニートなどの若者問題も、地域社会では日常的であり、それが犯罪の増加にもつながる危険性をはらんでいる。かつての農村部は宅地開発が進み、農業を廃業する人たちも多くなっている。よって田畑は荒れて、かつての共同体意識もほとんど失われてしまった。地域社会の人々は、これまでの生き方が通じないことを知りながらも、改善の処方箋をもつことができないでいる。

また、今後増加する団塊世代の人たちが地域社会でどのように生活するのも切実な問題である。これまで「会社人間」であった人たちが、これから地域社会で生活することになる。高齢者の介護や、フリーターやニートを扶養しているとすれば、これまでのように老後は年金だけで趣味やレクリエーションをやり気楽に過ごすことができるのであろうか。時代の変化により、地域社会の

人たちの生き方もこれまでの生き方が通用しなくなっている。

よって、地域社会の人たちも人生の設計や再設計が必要になる。大切なことは、各個人がキャリアデザインを図ることである。職業キャリアや、学校でのキャリア教育の必要性と同様に、地域社会でも人々のライフキャリアの設計や再設計を図ることが求められる所以である。

## (2) 市民のキャリアデザイン

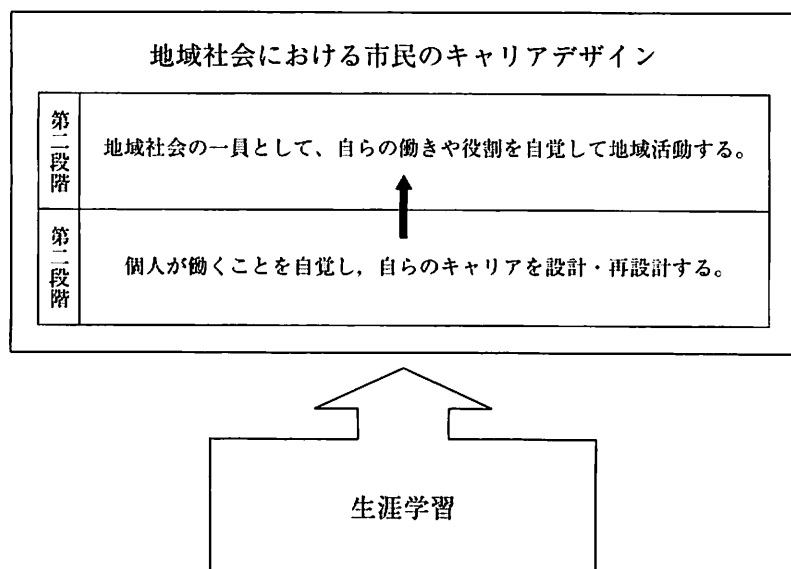
「キャリア」については、それぞれの主張・立場や用いられ方などによって多様性があるが、地域社会での市民のキャリアデザインという文脈の中では、渡辺三枝子のいう「キャリア」の概念規定に従う。

それは、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」<sup>(10)</sup> とする。なお、ここで扱う「働く」ことは、職業生活以外にも、家庭生活や市民活動など市民として地域社会で活動する様々な領域を含むものである。「キャリア」は、「個人」と「働くこと」との関係性の上に成り立つ概念であり、個人から独立して存在するものではない<sup>(11)</sup> ことが要点となる。

地域社会での市民のキャリアデザインを図1に示す。それは次のように2段階を想定することができる。まず第1段階は、個人が自ら働くことを自覚して、変化した自分の生活やその周囲のことを確認して、自らのキャリアの設計や再設計をはかることである。団塊世代の人たちは、家族の中での自分の役割が変化し、これまでの「会社人間」から自分の人生をどのように再出発するかを考えその実行計画を立てる。商店主は、商売がうまくいかなかったのを産業構造の変化のせいにするのではなく、自分の経営努力の不足が要因であることを自覚して、建て直しをはかることを考える。後継者不足というが、親がやる気をもって商売に取り組んでいれば、子はそれに希望をもち、後継者につくことになる。野田でも経営努力をしている商店に後継者不足は見られない。この段階では、個人が自分の「働くこと」の役割を自覚して、それを全うすることを心がけて実行することである。

第2段階は、地域社会の一員として、自らの働きや役割を自覚することである。第1段階では、内省的に自己を見つめなおすことに主眼が置かれるが、こ

図1 生涯学習と市民のキャリアデザインの関係図



ここでは地域社会での自己の立ち位置を確認するために、自分の働きと地域社会の様々なコミュニティとの関連性を理解し、それを自覚し意識化する。子育てをする親は、一般に子どもの育児に関係するコミュニティ（保育園、幼稚園、学校など）に参加して子育てに関する悩みや相談を共有するだろう。しかし実は親本人のキャリア形成を踏まえれば、個人の興味関心による他のコミュニティとの関連づくりも大事である。演劇や音楽などの文化関連や、自然保護などの市民活動などの多様なコミュニティ分野の人たちとの交流や接触を通じて知識や経験などを得て、それを自分のキャリア形成に役立てていくことである。さらに、そうしたコミュニケーションの促進が契機となり、地域社会に貢献する活動をし、自己のキャリア形成につながっていく。

この段階は、地域社会の様々なコミュニティとの関係づくりを通じて、自分の立ち位置を確認して、地域社会の一員としての自覚をもち、地域社会のためになる市民活動を通じてキャリア形成していくことである。それは個人の自立化を促進することを意味しており、地域社会における自立的な市民づくりをさ

す。これまでのような行政への依存的な住民体質から脱却し、責任と自覚を持つ自立的な市民をめざす。

そのために市民のキャリアデザインの方策は、キャリア教育の観点<sup>(12)</sup>を踏まえて、市民一人一人のキャリア発達や個としての自立を促す視点から、人生の発達の段階を踏まえ、市民の全人的な成長・発達を促す。そのために、市民のひとりひとりが多様な側面を持ちながら段階をおって発達していることを深く認識して、市民がそれぞれの発達段階に応じて自己とそのキャリア形成を適切に関連づけて、各発達段階を達成できるように意図的継続的に取り組みの展開をはかることである。

つまり、市民のキャリアデザインは、生涯学習の考え方を下支えとして、市民一人一人がそれを踏まえてキャリアデザインを目指すものである。自らの働きを自覚（他者理解を含む）して、それを設計および再設計する。さらに、地域社会の一員としての自覚をもち働き、地域社会での自らの役割や責任をはたす。そのプロセスが自立化する市民形成になる。

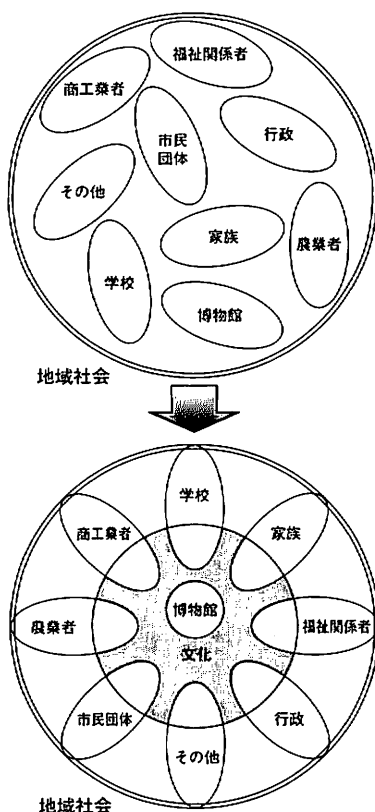
### （３）市民のキャリアデザインの拠点（図２）

それを実現するためには、人々のコミュニケーションを促進させることである。現状の地域社会をみると、それぞれのコミュニティ（家族・学校・商工業者・農業者・市民団体・福祉関係者・行政など）が分断的に孤立している。コミュニティが孤立化すると、それを構成する各個人レベルに至るまで内向きになってくる<sup>(13)</sup>。

そこで、博物館は市民のキャリアデザインの拠点として、さまざまなコミュニティに所属する人たち同士を＜文化＞によってつなげるハブの役割を担い、市民相互のコミュニケーションの促進につとめる。ここで留意することは、キャリアデザインは個人を対象とすることから、各コミュニティの個人を対象とする。現実には個人は複数のコミュニティに所属している場合が多い。

また、この場合の＜文化＞とは、回顧的な歴史や審美眼的な美よりも、人の「働き」（仕事・遊び・地域活動・芸道・家庭など）についての時空的な領域の調査研究成果や、様々な市民のキャリアから生み出された＜文化＞をさす。それは床の間に置くような懐古趣味的なものでなく、人々のキャリアデザインに

図2 市民のキャリアデザインの拠点の概念図



有用で、エネルギーになるようなものである。

それにより、地域社会では、これまで交流のなかった異業種や異分野の人たち同士が出会い知り合い、お互いの仕事や生き方、考え方、価値観などを共有し、相互に学びあうことができる。さらに、個人の生き方の幅が広がり、個人の生き方の設計や再設計にも役立ち、人々の協働的な仕事や地域活動に発展することが期待される。こうして成立した地域社会は、閉じられた存在ではなく、外に開放した人間関係性をもつものである。

よって、博物館はこれまでの「文化の殿堂」から、地域社会の様々なコミュニティに属する個人同士のコミュニケーションの推進役に転換する。



## 2. キャリアデザインの視点に立つ野田市郷土博物館

### (1) 博物館が扱う<文化>とは

博物館が扱う<文化>とは、キャリアデザインの視点に立った文化である。それはヒトの生き方との関連性による文化事象である。具体的には「働くこと」を時空的に扱うこともできるだろうし、それをテーマごとに各論的に扱うこともできる。

かつて野田市郷土博物館で私が手がけた特別展のテーマには次のようなものがある。「野田と貝塚」(1989年)、「古墳文化のあけぼの」(1990年)、「華開く押絵の新世界―勝文斉の偉業―」(1991年)、「旧石器時代の狩りと暮らし」(1992年)、「最後の浮世絵師豊原国周展」(1993年)、「櫻田精一―美をみる眼―」(1995年)、「よみがえる山中直治童謡の世界」(1996年)などである。これは一般の博物館でもよく見られるテーマの設定である。当時のことであるからキャリアデザインを意識したものではなかったが、今日的にみるとキャリアデザインを踏まえたものもある。テーマ設定についての統一的な基準は特に設けておらず、展覧会ごとに趣旨を設定をした。

これに対してキャリアデザインの視点による<文化>とは、人物をテーマにするならばその人のキャリアを調査研究して、その生き方、仕事の技、価値観などを描き出すことである。「勝文斉の偉業」では押絵師としての勝文斉の生き様を描いた。「山中直治童謡」でも、直治は昭和12年に31歳で亡くなったが、直治を知る人々からの聞き取り調査により、直治の人物像を描いた。また洋画家の櫻田精一の特別展では、そのキャリアや人生観や価値観などを調査してその成果を展覧会に反映することができた。今日的に見てもキャリアデザインの視点に立ったものであったといえる。「豊原国周展」ではその作品紹介や浮世絵製作の技法をしたので、キャリアデザインのそれとはいえない。キャリアデザインの視点に立つならば、浮世絵師としての豊原国周のキャリアを調査研究した知見を出すことであった。考古学関係の展覧会では、遺跡や遺物論になりがちで、時代や時期ごとに土器や石器を展示した。キャリアデザインの視点からならば、当時の自然や社会での人々の生き方を描くことになる。

キャリアデザインによる<文化>は、特別展のテーマに限らず、博物館のあらゆる事業に共通する価値観とみなして、それを貫き通すことである。

## (2) 基本テーマ

そこで博物館を地域社会のキャリアデザインの拠点とするために、次のような基本テーマを設定する。

### ①地域文化（モノとヒト）の情報収集・保管・調査研究・普及をする。

これまでの博物館は、モノとしての資料を収集・保管・調査研究・普及することを基本機能としてきた。キャリアデザインの視点に立った博物館は、それらの基本機能に加えて、地域社会の人たちのキャリアにも目を向けて、その情報の収集・保管・調査研究・普及をする。

### ②地域の文化や人々の生き方を学ぶ場にする。

近年、野田市内には市外から転入する人たちが増えている。このテーマは、人々に野田の歴史や文化を普及して地元意識や親しみをもってもらうことにつながる。以前から野田に居住している人たちにとっても、新しく創造した野田の文化を学ぶことは、地域を再認識することになる。さらに、キャリアデザインの視点に立てば、野田の先人や現代の人々のライフヒストリーを学ぶことは、人生を見直すことになり、そこから人生の設計や再設計にも有益な情報を提供することができる。

また市民会館は、醤油醸造家の歴史的建造物として国の登録文化財（旧茂木佐平治邸）に指定されている。ここでは、日本の伝統的な文化や生活を体験する場としての活用をはかる。

### ③地域の文化や人の生き方の情報発信の場にする。

博物館として地域文化（モノとヒト）の情報収集・保管・調査研究したことは、博物館を訪れることのない人たちや、訪れることのできない人たちに向けても、インターネットなどにより情報発信して普及する。地域社会を外に開放化するために、日本各地の人たちや海外にも情報発信する。これまでの地域社会に見られた閉ざされたコミュニティから脱却し、開放型の地域社会を目指すものである。

### ④人々のコミュニケーションの場にする。

博物館では、＜文化＞をコミュニケーションの媒体として、様々なコミュニティ（家族・学校・商工業者・農業者・市民団体・福祉関係者・行政など）の個人同士のコミュニケーションをはかる。博物館展示室は展示スペースだけに

限定せずに、コミュニケーションの場としても活用をはかる。また市民会館も和風建造物の特性を活かしてコミュニケーションの促進をはかる場にする。

### (3) テーマに関連する主要事業

#### ①地域文化（モノとヒト）の情報収集・保管・調査研究・普及をする

これまでの博物館が対象とする資料はモノであったが、キャリアデザインの視点に立つ博物館はヒトも対象とする。人の記憶のなかにも多くの情報が含まれている。

情報の収集については、様々なキャリアをもつ人たちからキャリアヒストリーの聞き取り調査を行う。また寺子屋講座の「仕事人講話」では、地域の様々な職業人のキャリアを聞くことができ、その記録化を行う。企画展も、それに参加する人たちからキャリアを聞く機会にする。人々のキャリアヒストリーからは、生い立ちや仕事のこと、昔日の野田の様子や人間関係なども聞くことができる。

展示関係については、常設展を「野田の人々の生活と文化」（仮題）というテーマで実施する。また企画展は年間3回を予定する。「市民コレクション展」、「市民の文化活動報告展」、「市民公募展」のいずれも市民参加型展示である。

市民コレクション展は、コレクションをもつ人からコレクションの提供を受けて、コレクションを通じたライフヒストリーを公開する。単なる貸しギャラリーとしてではなく、資料の提供者と学芸員が協働して展示構成などを考える。資料の提供者には自身のキャリアを振り返る機会にしてもらうとともに、市民のキャリアデザインに役立てる。

市民の文化活動報告展は、市民グループがこれまで培ってきた研究成果などの発表の機会とする。学芸員とテーマや展示構成などを協働する。

市民公募展は、学芸員がテーマを決め、それをもとに市民から資料の公募を行う。資料の提供を契機にして、新たな人的交流が生まれることを促進する。

特別展は、地域の文化資源をキャリアデザインの視点から調査研究した成果を公開する。初年度は「野田の樽職人」（仮称）を予定している。醤油産地の野田には、大正時代には100軒を超す町樽屋があったが、醤油容器が壺からプラスチック製品に移ったことから、職人は僅か2名しか現存しない。しかも80

歳をこえる高齢者である。時代の変化のなかで、樽職人としてこだわり続けた職人のキャリアと技を調査研究して公開することで、市民のコミュニケーションをはかる。

## ②地域の文化や人々の生き方を学ぶ場にする。

これは自発的意思により学ぶことを基本とする。一つは寺子屋講座である。「まちの仕事人講話」と「芸道文化講座」を毎月1回開催する。講師は、地域のさまざまな仕事人や研究者などである。野田文化広場としては、これまで2年間実施してきたが、2006年度の内容を示す(表1)(写真1)。「仕事人講話」では、市民がライフヒストリーや仕事の技などを語る場になっている。「芸道文化講座」では自らが究めている芸道の途を語る。一方的に講師役の市民の話聞くだけでなく、進行役は参加者の自己紹介や意見や質問を自由に出すように促し、双方向的な学びの場としている。

「自主研究グループの育成」は、人々が博物館を拠点にして自発的な学習グループをつくり、課題を設定して調査研究することを後押しする。メンバーを募る方法はいくつかあるだろうが、一つは「人材バンク」に文化的な活動を求める人たちや、退職が予定される団塊の世代の人たちで新たな生きがいを見つけようとする人たちにも登録してもらい、興味関心を共有する人たちを集めて、学芸員が意見交換する機会を設ける。また文化的な連続講座を実施して、講座終了後に学芸員が活動の継続を呼びかけることも想定できる。

これは既存の会ではなく、博物館から新しく生まれる会にする。その後博物館としては学芸員がサポートを行うが主導をせず、あくまでも自主性を重んじて、自立的なグループに発展することを支援する。グループには、「趣味の会」のように閉じたコミュニティ形成をするのではなく、地域に貢献する活動を意識してもらう。要するに、市民のキャリアデザインの第2段階目のキャリア形成を実践することを意図している(図1)。将来的に自主調査研究グループの研究成果は、企画展などにも発展させる。さらに博物館から自立していくことを促し方向づける。

なおキャリアデザインの相談業務には、個人の生涯発達レベルや個別のキャリアを踏まえることが必要である。今後は学芸員にもキャリアカウンセラーの

表1 2006年度 寺子屋講座一覧

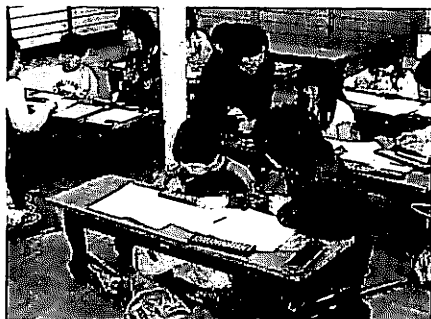
	まちの仕事人講話	芸道文化講座	親子体験学習
2006年 4月	かまぼこは活きている 蒲鉾の八木模代表 八木潔さん	油絵を身近に見よう 洋画家/日展評議員 櫻田久美さん	そろばんで脳力アップ! 日本珠算連盟野田支部長 芝崎三千子さん
5月	“自然”と生きること 三協印刷株式会社社員/野田日展保護連合会会長 石山啓二郎さん	音を楽しむ“音楽”講座 野田市立岩名中学校教諭 北村俊彦さん	わくわくダンス! ～おどりで何があらわされるかな?～ 東京大学大学院生/体操のお姉さん 古屋貴子さん
6月	生きている不思議 死なない不思議 日本福祉学会会長 高木次雄さん	桶梯の文化史 昭和女子大学講師 小川浩さん	A,B,C,さあはじめよう! ～音から学ぶ英語～ 東京大学大学院生/英詩朗読家 田尻英和子さん
7月	つくしんぼから やさしい風を… ～障がいをもつ青年達に届けて～ つくしんぼ運営委員/野田市障害者団体連絡会会長 加藤満子さん	語ること、演じること 劇団彩代表/演出家/俳優 梅田宏さん	折り鶴を生活に 折り鶴名人 林文夫さん
8月	アテンションブリーズ フラットアテンダント物語 ～夢で学んだ私の人生～ 元日本航空フラットアテンダント 高橋伸子さん	コレクションを気軽に愉しもう ～ミニカーからトレーディングカードまで～ ミニカーコレクター 飯塚保夫さん	茶室で茶道を体験しましょう 直千東茶道教室指導者 五十嵐宗裕さん
9月	大切なものを守る ～家族で考える防犯対策～ グリーン警備保障株式会社代表 田中鯉一さん	気軽に詩吟を始めてみませんか ～まずは声を出してみよう～ 吟道館講師 染谷魁さん	親子で学ぶ習字、そして 日本舞踊に挑戦しよう 藤岡勤実賞金主 藤岡勤実賞主
10月	働くことと教育 ～山古志村と私～ 野田市立北部中学校校長 坂牧光義さん	俺のまねをするな ～俳道人生40年、忘れられない人・ことば等を語る～ 作家 桃太郎さん	楽しい給手紙 パート2 ～誰でも簡単・やさしい描き方～ グラフィックデザイナー 本橋尚徳さん
11月	保育士・看護師から学ぶ ～アレルギー・伝染病・保護者への対応について～ 認可保育園こびーぷりすスクール 専任看護師・保育士たち	ロボットと開く 子供たちの未来 ロボカップジュニア千葉ノード代表 岡田晃次さん	親子でできる クリスマス・オーナメント教室 認可保育園こびーぷりすスクール 保育士たち
12月	私の農業 ～人生を懸けて～ エコファーマー・遠藤農園代表 遠藤徹也さん	まちなみ提案 山本建設工(株)専務取締役/まちなみ部会会員 山本和広さん	電卓を正しくつかってますか? ICA国際電卓協会野田支部長 森野珂津さん
2007年 1月	プロ野球選手の原石 ヤクルト球団総務部 前スカウト部 樫淵聡さん	大名が通った道 ～日光東往還について～ 野田地方史懇話会副会長 木原徹也さん	“鳴子の舞”よさこいソーランを 踊ってみよう!! 魁'seekigake代表 窪田洋子さん
2月	ブライダルの仕事 ～晴れ舞台の舞台裏～ ウェディング・プロデュース フローラ代表 長谷川愛さん	声明(しょうみょう) ～仏教音楽～ 徳宝院住持 楠祐信さん	スカイウォッチング入門 千葉県立宿城博物館 客員研究員 岩槻秀明さん
3月	スタジオからお茶の間へ ～ひとつの放送へのこだわり～ NHKラジオセンター アナウンサー 安田真一郎さん	俳句を作ろう パート2 俳人 津々楽朋子さん	押し花で遊ぼう パート2 押し花アトリエ プチ・フルール 小林敏子さん

研修を受けさせるなどの人材育成をする。

### ③地域の文化や人の生き方の情報発信の場にする。

地域の文化を情報発信するだけでなく、キャリアデザインに関する活動や成

写真1 2006年度 寺子屋講座と観月会



2006.4.16 「そろばんで能力アップ!」 芝崎 三千子さん



2006.10.15 「俺のまねをするな ~夢遊人生 40年、忘れられない人・ことばを語る~」 桃太郎さん



2006.9.17 「気裡に鈍めを始めてみませんか ~まじは声を立てよう~」 染谷 昌さん



2006.7.16 「折り鶴を生活に」 林 文夫さん



2006.9.17 「親子で学ぶ習付、そして日本舞踊に挑戦しよう」 篠岡 陽貴さん



2006.9.17 観月会

果についても内外に発信する。新聞などのマスメディアのほかに、ホームページによる情報を毎月更新して発信する。また、市内ガイドを行っている市民グループ「むらさきの里野田ガイドの会」にガイド事業を委託して、市内外の人

たちに対する観光ガイドを実施する。このグループの活動は、地域社会を外の人たちに開放していく上からも有効である。

#### ④人々のコミュニケーションの場にする。

これまで蓄積してきた人的ネットワークを維持、発展させつつ、博物館をコミュニケーションの場にする。

まず市民会館内にキャリアデザインホール（仮称）を設置して、市民の日常的なコミュニケーションの場にする。博物館に立ち寄った市民サロンのようなスペースとする。特に目的をもって来館しなくとも、自由放談の場にする事で、そこで出会った人たち同士にコミュニケーションが生まれることを想定している。学芸員も同じホールに居ることから、学芸員とのコミュニケーションをはかることもできる。室内には、全国の博物館発行の図録のほかに、キャリアデザイン関連図書の充実化もはかる。

企画展・特別展では開会に合わせてレセプションを行う。会期中、展示室ではミュージアム・コンサートを実施する。そのために展示室にはグランドピアノを設置する。また地域の童謡作曲家の山中直治の記念コンサートも毎年開催する。博物館はこれまでのように展示空間としてだけでなく、コミュニケーションをはかる場にする。

市民会館は和風の歴史的建造物であり、庭園の環境も含めて、人々のコミュニケーションをはかる良好な場となる。ここでは観月会などの市民交流会を開催する。これまでに観月会を2回実施したが、約90名の市民が参加して演奏を聴いたり、満月を鑑賞するなど盛況であった（写真1）。

### 3. キャリアデザイン政策と指定管理者制度の導入

野田市は、全国の自治体に先駆けて「市民のキャリアデザイン」を行政の政策に位置づけた。今後は、野田市の様々な組織や機関で具体的な事業展開が行われることになっている。野田市から示された、野田市郷土博物館の指定管理者申請要項に示されたビジョンは次の通りとなる。

野田市では、郷土博物館と市民会館に指定管理者制度を導入し、キャリアデザインの拠点にしたいと考えています。

キャリアデザインとは、家庭、学校、職場、地域など人生のあらゆる場所と時期に、「自分らしい生き方（キャリア）の設計（デザイン）あるいは再設計」のために必要な知識、技術を身につけ、これを実践することをいいます。また、キャリアデザインによるまちづくりとは、これまでのような行政などへの依存的な住民体質から、市民として生きがいをもち責任と自覚をもつ自立的な市民を育てていくことをいいます。換言すれば、キャリアデザインによるまちづくりとは、『ひとづくり』となりますので、あくまで市民が実施主体となり、行政は、市民と協働しながら、必要な情報や器としての場の提供などのサポートに徹し、市民がそれを活用していくことが重要となります。このため、地域あるいはコミュニティの場でのキャリアデザイン支援策を考えたとき、そのコンセプトは、まず主役は行政ではなく市民であり、行政の役割は市民に「交流と学びの場を提供」していくことではないかと考えております。

一方、郷土博物館につきましては、昭和34年に設立された県内初の登録博物館として、その果たしてきた役割は非常に大きなものがありますが、社会教育から生涯学習社会への流れの中で、博物館の役割も変化し、今求められているのは、これまでの調査研究機能を活かしつつ、住民参加型の「市民が直接参加しながら学び、研究し交流する場」への転換ではないかと考えていました。また、市民会館につきましても、昭和31年開館以来、多くの市民に利用されてきましたが、平成8年には「市民会館有効利用懇談会」から、単なる貸館ではなく、和風建築のメリットを生かす等さらなる有効利用を図るべきとの提言もなされ、平成9年には国の登録文化財の指定も受けましたが、今日まで有効な文化財の活用策が見出せない状況が続いておりました。

このため、これらの状況を考え合わせた時、郷土博物館を住民参加型へ転換すれば「交流と学びの場」というキャリアデザイン支援策と共通のコンセプトができるのではないかと考えましたが、博物館には会議室等、市民が滞在、交流する場所がありませんので、市民会館に生涯学習機能を付加し、両者を一体管理することで、キャリアデザインの拠点として住民参加型の博物館への転換を図り、かつ貸館機能を維持しつつ、市民会館の有効



活用も図りたいと考えています。

以上のことを踏まえて、野田文化広場としては、先述したように博物館運営の基本的な考え方をまとめた。

## (2) 日本キャリアデザイン学会と野田市との連携

2004年9月に日本キャリアデザイン学会の設立大会が法政大学で行われた。この学会はキャリアデザインやその支援に必要な知識や理論を構築することを目的に設立された。学問は机上で行うものでなく、現場との双方向的な関係があって成り立つものであるとの認識から、研究者と実務家のバランスに配慮して準備が進められた。野田市長の根本崇氏には地方行政の実務家としての立場から理事に加わっていただき、翌年6月に野田市で中間大会を開催した。

その中で、根本氏は、三位一体の改革の中で、自治体の首長として、行政と住民の役割について提言している。現状の地方財政難を踏まえて、これまでの行政の過剰サービスから脱却するために、住民が主体性をもち自らの役割を果たしていくために、住民一人一人がその考え方や行動を見直して、限られた資源を有効に活用して「まちづくり」に参加できるように、行政としてもそのための環境整備を進めていくことを述べている<sup>(14)</sup>。

「まちづくり」は、行政主導で行う時代から、市民との協働により進めるために、人々の意識改革をはかることが不可欠である。中間大会を契機にして、野田市は、住民がキャリアデザインをはかる必要性を認識したといえる。国家や政府（地方政府の含む）としての「公」が住民を主導・誘導するような、これまでの行政の体制ではなく、人々がキャリアデザインにより個の確立をはかることを支援し、市民と協働して「まちづくり」を目指そうとするものである。こうして、野田市は日本キャリアデザイン学会との連携事業により、「市民のキャリアデザイン」を政策に位置づけるに至った。

## (3) 指定管理者制度の活用

指定管理者制度は、地方自治体の改正により2003年9月から施行された。これまでの公共施設は自治体が直営で管理運営するか、公設民営方式の財団法人などに管理委託してきた。しかし、その改正により、従来の管理委託制度に代

わり、民間の団体や組織に選定することが可能になった。登録博物館などで指定管理者制度がすでに導入及び予定されている事例は、111館（文部科学省調査2006年2月1日現在）である。それらは公設民営方式の博物館が指定管理者となり再スタートしたものや、行財政改革により導入した事例などである。今回、野田市は博物館運営に指定管理者制度を導入したが、その理由は次の通りである。

まずは、野田市は「市民のキャリアデザイン」を政策とし、博物館で事業展開をはかろうとしたことである。これまでの直営の博物館の体制では、キャリアデザインの考え方や実績がない。しかし、野田文化広場はこれまで2年間にわたり寺子屋講座などのキャリアデザイン関係の活動をしてきた。このことを評価して、野田文化広場を事業を実施する主体者として指定した。

次に、市民会館は登録文化財の歴史的建造物であるが、野田市から示された先述のビジョンにもある通り、平成8年以来有効な活用策が見出せずにきた。「市民のキャリアデザインの拠点」と位置づけることにより、活用の方向性が得られたことによる。

また、行政改革の上から、旧関宿町との合併による定数削減目標は平成21年度までに220人削減化することになっている。平成19年度当初職員数1208人（150人減）であることからさらに70人を削減する。現に私が5年前に退職してから学芸員の補充はなく、これまでに館長・事務・学芸員の3人体制（常勤）となっている。

これは、全国の自治体の大半が指定管理者制度を単なる経費削減策としてきたこれまでの動向とは異なり、新しい政策に基づく事業の担い手として位置づけるものである。また、指定管理者の立場は、行政の補完的な存在ではなく、これまで行政では未経験の新規の活動を、実績を有するNPOに委任するものである。これは先述した根本市長の発言にあるように、「まちづくり」について住民が主体性をもち役割を果たす環境づくりの実現を意味している。

#### 4. 「民の公共」の実現に向けて

博物館は公共の文化施設である。一般に理解されている「公共」の意味は、「政府や地方自治体が運営管理すること」、あるいは「入館料が安い、あるいは

無料で誰でも自由に利用できること」などであろう。

しかし、今後NPO法人野田文化広場が博物館を運営管理するようになると、これまでのような自治体の直営と異なり、市民が「公共」を担うことができるのかという疑問が浮上するかもしれない。公務員からは市民に何ができるのか疑問視する意見が出されていることは周知である。しかし、これまで国家や政府の「公」が公共を担っていたが、必ずしもそうではなく住民がその担い手になる時代になりつつある<sup>(15)</sup>。

山脇直司は「公共哲学」を提唱する<sup>(16)</sup>。山脇は、公共性を理解する従来の考え方として、「政府の公／私的領域」という公私二元論は戦前の「減私奉公」や、戦後の自己中心的な「減公奉私」という二極分化を示し、現代社会での諸問題の解決にはもはや機能不全であるとする。それを乗り越える対案として、山脇は「政府の公／民の公共／私的領域」の相関的な三元論を示し、「民の公共」を最も重要な要素と見なして、金泰昌が提起した「個人を他者関係のなかで活かしながら、民（人々）の公共性を開いていく」<sup>(17)</sup> という意味の「活私開公」という言葉によって、公共哲学の方向性を導き出している。この活私開公は、「人権、市民的徳性、責任」の3つを基本原理<sup>(18)</sup>とし、個人の特性を他者との関係の中で活かしながら公共性を形成していこうというものである。

これは博物館についても同じようなことがいえる。明治以降の近代化の中で、国立博物館をはじめ地方博物館は殖産興業や国威発揚の社会的な装置として「政府の公」が国民を教化した<sup>(19)</sup>。戦後も、博物館は「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行ない、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」（博物館法第2条）というように、「政府の公」が、学芸員による調査研究の成果などの情報を国民に一方的に供与することを理念としている。

「民の公共」とは、市民が「活私開公」の主体者となり、公共性を開拓し継承していくことである。野田文化広場のようにNPOが博物館を運営する場合には、行政や他の市民とのコミュニケーションをとることが不可欠である。先述したミッションや基本テーマとそれに基づく各種事業を実施し、議論や協働

などを経て公共性を模索し実現化をはかることになる<sup>(20)</sup>。

また、学芸員を含むNPOのメンバーは、山脇の提言する「グローバル」な態度をもつことも大事である<sup>(21)</sup>。これは「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」である。グローバリズムの弊害と偏狭なローカリズムを共に拒否して、自らの地域性を重視して文化や歴史の多様性を認める。要するに地域を中心に考える態度と、地球規模で眺める態度との両方のバランス感覚を保つことが必要である。「民の公共」とは、決して一つの視点に偏らずに、常に異質な他者と多次元（「地球市民的自己」「国民的自己」「エスニックな自己」、地方自治体・企業・NPO・教会・学校・家族などに所属する「負荷ある自己」など）的な関係を認識・了解することも大事である。

こうして、野田文化広場が指定管理者として野田市郷土博物館を管理運営していくことは、「民の公共」を実現化する一つの試みともなる。

## 5. 結語

キャリアデザインは、地域社会で生活する人たちにとっても不可避となっている。高度経済成長期に比べて1990年代以降の産業構造の変化によるニューエコノミーの到来によって生じている「格差社会」により、人々にはこれまでの生き方が通用せずし、新たな人生の設計や再設計が必要となっている。

市民のキャリアデザインは、生涯学習の考え方を下支えとし、市民一人一人がそれを踏まえてキャリアデザインを目指すものである。自らの働きを自覚（他者理解を含む）して、それを設計および再設計する。さらに、地域社会の一員としての自覚をもち働き、地域社会での自らの役割や責任をはたす。そのプロセスが自立化する市民形成になる。

それを実現するためには、人々のコミュニケーションを促進させることである。現状の地域社会をみると、それぞれのコミュニティ（家族・学校・工商業者・農業者・市民団体・福祉関係者・行政など）が分断的に孤立している。そこで、博物館は市民のキャリアデザインの拠点として、さまざまなコミュニティに所属する人たち同士を＜文化＞によってつなげるハブの役割を担い、市民相互のコミュニケーションの促進につとめる。これまで交流のなかった異業種や異分野の人たち同士が出会い知り合い、お互いの仕事や生き方、考え方、

価値観などを共有し、相互に学びあうことによって、個人の生き方の幅が広がり、さらに個人の生き方の設計や再設計にも役立ち、人々の協働的な仕事や地域活動に発展することが期待される。博物館をこれまでの「文化の殿堂」としての一つのコミュニティから、地域内の様々なコミュニティの個人のコミュニケーションの推進役として、その中心的な拠点に位置づける。

野田市郷土博物館は、「市民のキャリアデザイン」をはかるために次の4つのテーマを掲げる。①地域文化（モノとヒト）の情報収集・保管・調査研究・普及をする。②地域の文化や人々の生き方を学ぶ場にする。③地域の文化や人の生き方の情報発信の場にする。④人々のコミュニケーションの場にする。それぞれのテーマに基づき事業を展開していくことになる。

さらに、NPOが指定管理者として野田市郷土博物館運営することは、「民の公共」を実現させていく一つの試みともなる。

#### [注]

- (1) 金山喜昭2006「日本キャリアデザイン学会中間大会（千葉県野田市）2005を振り返る」キャリアデザイン研究Vol. 2、p135-142（日本キャリアデザイン学会）

児美川孝一郎氏は大会の総括を次のように整理した。その要点は次のとおりである。

①まちづくりで＜参加＞をキーワードにすると「企業やNPO、普通の市民、子供、それぞれの参加の形はいろいろある。市民参加、企業参加、行政参加、それぞれのネットワークがあり、行政はそれぞれの意向を掴んでいるだろうが、それらが一緒に場に集り学校側と企業は協力できるのか、NPOと学校は一緒にできるというような、対等なパートナーシップでまちづくりをしていく仕掛けがあるとよい。

②「負担は皆で合意して分け持つ」という行政側の意見には賛成するが、負担するからには市民としても意思決定のプロセスに参加すること。

③個人が地域の人間になるか、まちづくりの担い手になるか。シチズンシップということがよく言われるが、市民性とか市民的な資質とか、市民として考えたり行動する市民性を自分のなかでつくるキャリア形成というのがあるのか。どのように地域の担い手になり、地域の市民になっていくのかというキャリアデザインが大事である。

- (2) 2006年12月の野田市議会で、郷土博物館と市民会館それぞれの設置条例の改正が議決される。
- (3) 金山喜昭2006「まちづくりと市民のキャリアデザイン (1) ~NPO法人野田文化広場メンバーの場合~」法政大学キャリアデザイン学部紀要第3号、p237-256
- (4) 昭和56年6月11日中央教育審議会答申。
- (5) 昭和61年の第2次臨時教育審議会の答申「審議経過の概要」。
- (6) 山田昌弘2004『希望格差社会』筑摩書房、p100-128
- (7) なお、ここでいう地域社会とは、野田市の中心市街地を中心に市内全域をさす。人々の社会的・生活空間の一定の広がりやさす。
- (8) (6) と同様p75
- (9) (6) と同様p96
- (10) 渡辺三枝子他2004『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究者会議報告書』p7
- (11) (10) と同様
- (12) (10) と同様p8
- (13) 広井良典2006『持続可能な福祉社会』ちくま新書、p204-246
- (14) 根本崇2006「“まちづくりとキャリアデザイン” 報告」キャリアデザイン研究Vol.2,p143-145 また未掲載であるが中間大会のシンポジウムでの発言による。
- (15) 大森彌2004「身近な公共空間」『公共哲学11-自治から考える公共-』東京大学出版会、p155-168
- (16) 山脇直司2004『公共哲学とは何か』ちくま新書、p8-12
- (17) (16) と同様p37
- (18) (16) と同様p145-151
- (19) 金山喜昭2001『日本の博物館史』慶友社、p34-166
- (20) 公立博物館においては、学芸員は博物館の活動を市民に積極的に開放して、市民の主体的な活動を支援してその自立化を促してゆくことが大事である。
- (21) (16) と同様p207-222

謝辞：本稿の作成については、法政大学キャリアデザイン学部の笹川孝一氏には生涯学習とキャリアデザインの関係性について有益なご助言をいただいた。

また川喜多喬氏には、日本キャリアデザイン学会の事務局長としてご支援をいただいた。また、柏女弘道、田尻美和子、横地留奈子の各氏とは、今後の野田市郷土博物館の事業関係について有益な話し合いをはかることができた。以上の方々に記して感謝申し上げる。